[特集2]

飯舘村にとって最も重要な問題は何か。100人が集まって考えました。

――ICRPダイアログセミナー第6回「飯舘村」

チェルノブイリ事故を知る海外の識者や、国内の放射線防護の専門家たち、そして飯舘村の住民のみなさんが、一堂に集って「飯舘村」のことを話し合う対話集会が開かれました。分断を越えて、世代を越えて、私たちがさらに村の「未来」を考えていくための、熱い議論がありました。

7月6日から7日の二日間、福島市の市保健福祉センターで国際放射線防護委員会（ICRP）の対話集会「ダイアログセミナー」が開かれました。

対話集会は6回目。福島第一原発事故によって、長期間影響を受ける地域の生活回復を考えるための集まりで、今回は「飯舘村――問題の認識と対応」がテーマでした。専門家や村の関係者約100名が参加しました。

（ICRPという組織について簡単に補っておきます。放射線防護という学問があります。「人間とその環境を、放射線被ばくや放射性物質による汚染から防護し、放射線障害の発生を防止すること」※1が研究目的です。ICRPはこの放射線防護に関する専門家の集まりで、日本国内の放射線に関する多くの法令や制度にもICRPの考え方や勧告が反映されています。）

「心の分断」が起きている

では、「飯舘村」をテーマとした今回の対話集会ではどのようなことが話し合われたのでしょうか。外国からの参加者も多数お見えになっていたので、はじめに菅野典雄村長が、全村避難を余儀なくされた経緯をあらためて説明しました。

村長は、「放射能の災害が人々を分断させている。家族が離ればなれになり、地域による賠償など『心の分断』が起きている。我々の生活に寄り添う支援や政策が必要だが、なかなか進まないジレンマの中にいる」と現状を分析しています。

「我々の生活に寄り添う支援や政策が必要だが…」

専門家の報告、村の若手の発言

続くセッションでは、飯舘村の放射線量の推移や、除染対策の実績と研究、農地の除染実験、線量の下がらない住居に使えるかもしれない遮蔽シートの紹介など、農家や住民、専門家からの報告がありました。

「被害者である自分たちがなぜ遮蔽シートを導入しなければならないのか？」「飯舘の分断は、帰るか帰らないかではなく、何とか前に進みたいという人と、まだそうは思えない人、つまり、国や専門家に見捨てられたと絶望している人たちとの間の分断なのではないか」といった村の若手の発言をきっかけに、午後のパネル討論では熱のこもったやりとりが行われました。

「帰れる時が来るかもしれない、という気持ちに変わりつつある」

住民の願い 現状を知りたい

村から参加した傍聴者から、「（避難先に暮らす）家族が50年かけて守ってきた山が、今どういう状況にあるかを見たい。線量を測ってみて、徐々に下がっていることがわかれば安心する。子どもたちも飯舘村で農作物は作れないと諦めていたが、線量が下がっているのを見て、帰れる時が来るかもしれない、という気持ちに変わりつつある」という体験も語られました。

もっと住民、とりわけ若者の声に耳を傾けながら政策を決め、実施してほしい、現実がどうなっているか自分の目で見て判断材料を得たい、など世代を越えて活発な意見が交わされました。

今回の対話集会では、飯舘村からの参加は十数名でしたが、その方々の発言が参加者全員の心を揺さぶる場面が幾度もありました。村の中には素晴らしい意見をもち、実践している人が大勢いる、それを村内外に伝える場がもっと必要だ、という意見も寄せられました。

村の将来のため対話集会の意味

今回の対話集会を企画したのは、ICRPのジ

村からの参加者が少なかった今回の対話集会。村民同士が世代を越えて話し合える場づくりが求められていると感じました。

専門家からは除染実験・線量測定について報告されました。

※1 原子力百科事典「ATOMICA」

ICRPダイアログセミナーに参加して

生き甲斐など心の問題を重視しなければ

菅野宗夫（佐須行政区、農業）

セミナーに参加したのは今回で3回目。これまでも、飯舘村の現在を伝え、村の課題を知ってもらうために、そして、再生に向けて経験と知恵を共有したくていろいろと発言してきた。

原発事故がもたらした影響は計り知れないほど大きく、多くのものを失ってしまった。命の大切さ、衣食住に限らない基本的人権の保障、物質的なものにとどまらない生き甲斐など心の問題、これらを重視した対応が急務であることを、これまでのセミナーでは訴え、参加者の理解を求めてきた。

飯舘村の再生に向けては、避難者自らが対応すべきもの、自治体・行政が対応すべきもの、専門家や研究者が対応すべきものなどがある。どれかが欠けてもうまく行かない。実際、飯舘村民は、この二年半近くの経験で骨身に沁みている。三者の協働がたいへん重要だと思う。

今回のセミナーでは、いつ帰れるか見通しは具体化していないが、帰れる条件が整ったら、若い人も年寄りも、男性も女性も、帰る人も、帰りたくともすぐには帰れない人も、帰らない人も、それぞれがお互いを尊重し理解を示しながら、飯舘村の再生に取り組むことが必要であると感じた。

日本中、世界中の人々に理解をしてもらうには、村民が心を一つにして行動していくことが必要である。離れて暮らしていても、お互いを尊重し、思いやって暮らすことが大切であると思う。

ICRPダイアログセミナーに参加して

世代を越えて多様な意見を聞く

菅野義樹（比曽行政区、畜産農家）

対話集会に参加して感じたことが二つあります。一つは事故後途絶えていた世代間のギャップをお互いの思いを聞きあって、理解できたことです。それが良かったです。

事故後は自分の今後を考えることで精一杯でした。しかし、今回ダイアログセミナーに参加して、中高年の飯舘に対する思い、土地や先祖に対する深い思いを聞いたように思いました。互いの意見を聞きあうこと、そして意見の多様性を許容することが、一見遠回りになるようで、飯舘村を中長期で次世代につないでいくことになるという感覚を持つことができました。

もう一つは、専門家と住民の距離がまだまだ遠いこと。飯舘に関わっている専門家の方からは飯舘の困難がさまざまに語られましたが、そのむずかしさは専門家の中でも共有されづらい問題だと改めて感じました。

土壌改良や除染といった個別の課題とは別の、現在の日本社会において、放射能汚染がもつ独特の困難については触れられませんでした。専門性をどう飯舘の暮らしにつなげていくかという議論を次回行ってほしいと思いました。

ヤック・ロシャールさん。「飯舘の将来をどうするか考えていくためには、東京の人・外部の人ではなく、飯舘村の人自身がお互いに意見を交換し、回復の方策を設計し実践していく必要があります。事故後の村のみなさんの経験は、自分たちの一番大切な価値が何なのか、それを考え直す機会になるでしょう」と話します。ロシャールさんは、チェルノブイリ事故から10年経ってベラルーシの村に入り、村の人々と苦労をともにし、生活の回復を担った経験をお持ちです。「飯舘村のために」「飯舘村の人々ともに」という原則を忘れず、ご自身の専門知識を生かして村のお役に立ちたい、と話してくれました。

チェルノブイリ事故を知る海外の識者が参加。

かわら版スタッフも今回の会場設営に参加したのですが、ロシャールさんご自身で丁寧に机と椅子を並べていたのが印象的でした。手作り感あふれる会場は円卓になり、話し合う人と人のあいだの距離にまで配慮した設営ができあがりました。

チェルノブイリを体験して。知識や情報よりも大切なこと

対話集会から一週間後、ロシャールさんに再び話を伺いました。ロシャールさんは現在、専門分野に従っていくつかの部会に分かれるICRPの第四委員会の代表であり、ICRP全体の副委員長も務めています。

「飯舘のセミナーでお話を伺い、前向きなものを受け取ることができました」とロシャールさんは感じているようです。チェルノブイリ事故後、ベラルーシで支援活動を行ってきたロシャールさんは、知識や情報を伝えることよりも、現地の人々の意志を実現するために助言することが大切だ、と言います。

「村の人々の『ために』行動するのではなく、みなさんが抱える問題を、『ともに』、『じかに』、『具体的に』受けとめ、行動することが大事です。村のみなさんが専門家になるのが目的でもないし、専門家が村のみなさんを指導するのでもだめです。村の人々と専門家が協力していく。それしか道はありません」

「村のみなさんが専門家になるのが目的でもないし、専門家が村のみなさんを指導するのでもだめです」

原発事故後、今回で9度目の来日となったロシャールさんは、印象に残っている出来事を教えてくれました。

「いわきの末続で、素敵な女性と出会いました。彼女ははじめ、『ここに住むのは安全ですか？』と私に聞いてきましたが、私は『それはわかりません』と答え、『心配事はなんですか』とたずねました。彼女は『子どもや孫たちが会いに来てくれなくなった。みんな東京に住んでいて、いわきに来るのを怖がっている』と言います。そこで私は、『あなた自身で家のなかを計測し、安全か危険かを判断してください』とお答えしました。彼女は実際に自分で線量の測定を行い、その数値を子どもたちに伝え、その結果、ふたたび末続に来てくれるようになりました」

「その土地に住む人本人が行動を起こすこと」

このエピソードから、ロシャールさんが大事にしていることがよくわかると思います。「その土地に住む人本人が行動を起こすこと」です。

「今回の対話集会はまだ第一歩です。最初はほんの小さな流れであっても、一人ひとりの意志と行動がひとつにまとまれば、時間はかかってもやがて力強い流れになるでしょう。お役に立ちたいと思っています」

ICRPダイアログセミナーに参加して

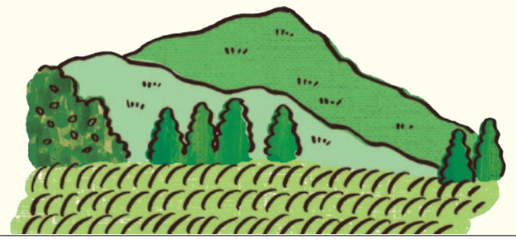
聞いてみなければ相手を理解できない

菅野クニ（宮内行政区）

ダイアログセミナーに参加して、村民の参加者は少なかったことに気づきました。その理由を考えてみると、この対話集会が開かれることをほとんどの村民が知らなかったからではないかと思います。

私が参加したのは二つの理由があります。昨年7月開催の第3回セミナー「食品についての対話」に偶然発言者として参加して良かったことと、今回特別に「飯舘村」を取り上げていただいたからです。それぞれの研究者から発表があり、飯舘村の現状を「客観的」に考えることができ、発言者の言葉にうなずいたり、情けなくなったり、反発する感情と戦う自分がいたり、とたった二日間でしたが、中身の濃い有意義なものでした。

その結果得たものは、①年齢性別を越えて、話さなければ、聞いてみなければ相手を理解できないこと。②客観的な資料でも、伝え方、伝わり方、伝え手、受け手により理解も大きく変わってくること。③私たちが直面している原発事故による放射能汚染と避難という現実の前では、正解はなく、一人ひとりの生き方や考え方が大きく未来を変えていくということ。そして④飯舘村に帰る人も帰らない人も、帰れない人も健康であることが第一であるということです。



飯舘村のみなさんへ

ジャック・ロシャール

7月6日・7日、「ダイアログセミナー」開催中に何人かの方にお会いしただけですが、それでも私はみなさんの状況をいくらかは理解できているのではないか、と思っています。

みなさんが心の奥深くでどのように感じているか、よくわかるからです。チェルノブイリ原発事故の影響を受けた地域にフランスから何年か通ううちに、原発事故が招いた無力感や怒り、傷ついたプライドを心の奥に抱えた人々を知るようになりました。同時に、人々の内にある希望、責任感、意志の強さも学びました。

福島の事故の影響を受けた他のたくさんの村と同様に、飯舘において試されているのは、みなさん一人ひとりが自分の人生を再びコントロールできるか、再び生活にまつわる色々な課題に取り組めるか、老人をいたわり、次の世代を生きる人々のために環境を整えておけるか、といったことです。つまりは、みなさんがもう一度、自分たちの尊厳（そんげん）を取り戻せるか、ということなのです。

飯舘でいったい何をすべきなのか、と答えを迫られることもありますが、私は村の状況をまだ十分に知りません。ですから、個人的な意見や具体的な助言を伝えることはしません。

しばらくは耳を傾けることに専念するつもりです。二日間の集まりで私が理解したのは、生活状況改善をめざし、ボランティア精神と連帯感に基づいた、めざましい活動・実践がいくつも試みられている、ということです。

また集会に参加して感じたのは、みなさんがまず一番にご自身の力を信じて、現在の状況を打開していこうとされていること、その積極的な姿勢が共有されていたことです。この意欲こそ、再生へと向かう決定的な一歩だと思います。私はこれをベラルーシの人々と共に学びました。

もちろん、飯舘村再生への歩みには、政府・自治体などの関係機関や専門家の協力も必要です。しかし、彼らはあくまで、みなさんが自らの生活を熱意をもって改善していくことに対して、その手助けに尽力するのです。みなさんが受け継いできたものを守る、それを応援するために存在するのです。

いみじくも、「ダイアログ」集会参加者の一人がおっしゃっていたことを思い出します。「復興への道は、ともに協力し合い、ともに働くことです」。

来秋、次回「ダイアログ」のために福島に参りますが、その時にぜひ飯舘を訪ねて来てほしい、とお誘いを受けたことを、私は胸の奥深くに刻んでいます。かならずや飯舘村にお邪魔し、村を探訪したい。みなさんにお会いしたい。お声掛けいただきましたので、ともに飯舘の「山」にも登りたいと思っています。

ともに飯舘の「山」にも登りたいと思っています。

甲状腺検査は継続的に受けるのが肝心。

編集後記

放射線について不安だったこと、わからなかったことが、「かわら版 道しるべ」を通じて手掛かりがつかめたかな、と思うことがあります。

一例は、今回の特集の「甲状腺検査」と「ホールボディーカウンター」。はじめは、一度検査を受ければある程度「内部被ばく」の状況がわかって、その後は検査の必要がないのかと思っていました。でも、継続して検査を行う理由や、検査結果の見方など、今回の特集内容は、子を持つ親が知っておいた方がいい情報だと思います。

何が正しい情報なのか、正直、いまだに判断がつかない場面が多くあります。家族の中でも議論は絶えません。その中で、住民の立場から取材している「道しるべ」を、各自の判断材料の一助としていただければ、と思っています。(H)

INFORMATION
インフォーメーション

福島市・相馬郡の医療機関での健康診査のお知らせ

今年度の医療機関での健康診査は9月30日までです。まだ健診を受けられていない方はお早めに、指定の医療機関での受診をお願いします。

実施期間＝平成25年9月30日まで
※福島市の乳がん検診のみ11月1日から12月31日まで

医療機関名簿と受診に必用な書類が送付されておりますので、医療機関に直接お申し込みください。お申し込みの際に「飯舘村の住民です。個別健診の予約をお願いします」と必ずお伝えください。

【問い合わせ】健康福祉課健康係：024-562-4224

県外避難者の方の健康診査に関するお知らせ

県外避難者の方の健康診査については、村が公益財団法人結核予防会に委託し、避難先地域の指定の医療機関をご案内いたします。結核予防会より案内が届きましたら、指定された医療機関での受診をお願いします。すでに実施期間も始まっております。

予約期間＝平成26年1月15日まで
実施期間＝平成26年2月28日まで

【問い合わせ】結核予防会予約センター：03-3292-9275（平日9時～16時）

内部被ばく検査と甲状腺検査のすすめ

村では内部被ばく検査と甲状腺検査の体制を整え、福島市のあづま脳神経外科病院で実施しています。いずれも年に1回は必ず検査を受けましょう。

内部被ばく検査＝4歳以上の方が対象。月曜日から日曜日まで。
甲状腺検査＝20歳以下、平成24年4月1日生まれまでのお子さんが対象。毎週水曜日。

【申し込み先】あづま脳神経外科病院
内部被ばく検査：080-5737-5123・080-5737-5124
甲状腺検査：080-5737-5122
※どちらの検査も予約が必要です。

「県民健康管理調査 こころの健康度・生活習慣に関する調査」の調査票回収のお願い

福島県では、県民のこころの健康を守るため「こころの健康度・生活習慣に関する調査」を福島県立医科大学に委託し実施しています。震災後の不安やストレスに少しでも早く対応して、安心して生活していただくために、皆さまから頂戴する調査票が重要です。回収にご協力ください。調査票は5月に行った村の集団健診の受診票と一緒にお送りしています。飯野出張所健康福祉課までお持ちいただくか、下記問い合わせ先に連絡し、返信用の封筒を送ってもらいご返送ください。

【問い合わせ】福島県立医科大学・放射線医学県民健康管理センター：024-549-5170（平日9時～17時）